

朝の準備行動に課題のある生徒に対する支援の検討

—特別支援学校における行動コンサルテーションを通して—

The effects of behavioral consultation on intervention to the preparing behaviors in the morning for the student at a special needs school

○土田菜穂, 中鹿直樹

○Naho Tsuchida, Naoki Nakashika

立命館大学 総合心理学部

College of Comprehensive Psychology Ritsumeikan University

Key words : 行動コンサルテーション, 朝の準備行動, コンサルティ

I. 問題と目的

行動コンサルテーションとは、クライアント（例えば、学校では児童・生徒）の行動上の問題に対して、応用行動分析的な手法を使って、コンサルティ（教員や保護者）とコンサルタントが協働で問題解決にあたるコンサルテーションである（Bergan & Kratochwill 1990; 加藤・大石 2004）。従来のコンサルテーションとは異なり、行動レベルで問題をアセスメントし、その結果をもとに計画した介入の効果を、客観的なデータを用いて検討することを特徴としている。また、コンサルタントはクライアントに対して間接的な介入になるため、直接的な介入を実行するコンサルティが主体的に参加することが必要不可欠となる。

本研究の目的は、特別支援学校中学部に在籍する男子生徒に対して、コンサルティが主体的に参加する行動コンサルテーションを通して、朝の準備行動における効果的な支援を検討することである。

II. 方法

参加者：クライアント（以下、対象生徒）は、特別支援学校中学部に在籍する男子生徒1名であった。担任からの相談内容は、「朝の準備行動の時間に担任に話し掛けたり手が止まったりするなど集中できない」であった。よって、朝の準備行動を標的行動とした。コンサルティ（以下、担任）は、対象生徒の担任で30代の男性教員であった。コンサルタントは、大学機関に所属する第一筆者であった。

コンサルテーションの内容：コンサルティである担任の主体的な参加のために、担任が実行しやすい介入計画をコンサルタントと担任とで一緒に立案した。また、介入の実行から観察記録まで担任が担当した。コンサルタントは、月に1度、直接観察と担任との話し合いを実施し、介入の効果を協議した。担任からの報告に対しては肯定的なフィードバックをした。

設定：朝の登校から朝の会の開始までを介入場面とした。朝の準備行動の内容は、①椅子のセット、②宿題の提出、③かばんの片付け、④登校チェック、⑤体温チェック、⑥お茶の準備であった。

手続き：介入は、ベースライン・介入1・介入2・介入3の順で実施した。情報収集の結果、朝の準備中に手が止ま

って中断する要因として、①中断することで担任からの注目が得られること、②朝の準備を早く終わらせても個別課題の時間が増えるなど本人にとって良い結果が得られないことなどが挙げられた。介入1では、担任が対象生徒に対して、準備を実施する順番を自分で決めるよう提案した。また、担任は対象生徒と一定の距離をとって見守った。介入2では、朝の準備が終わったらiPadをする時間を設定した。介入3では、制限時間30分で朝の準備が終わったら残りの時間にiPadをする設定に変更した。また、対象生徒に対して、朝の準備行動の所要時間をグラフで提示した。

III. 結果

対象生徒の朝の準備行動の所要時間を図1に示した。ベースラインの所要時間は、平均25分であった。準備行動の途中で担任に話し掛けたり、手を止めて中断したりすることがあった。介入1では、これまでとは異なる順番を自分で決めて実行する様子が見られたが、最終的にはこれまでと同じ順番を選ぶようになった。所要時間はあまり変わらなかった。介入2では、所要時間は日によってばらつきがあった。介入3では、平均13.8分となり時間が大幅に短縮された。

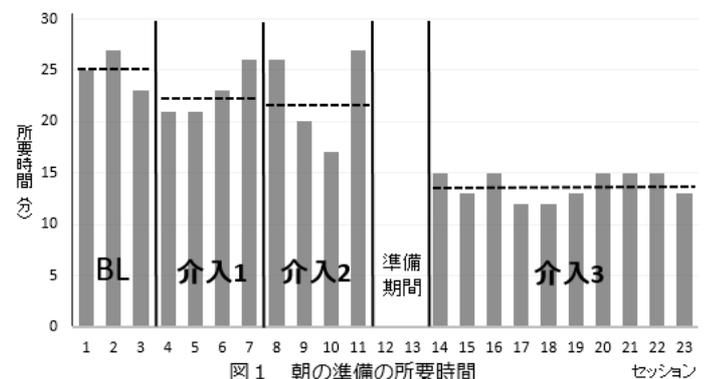


図1 朝の準備の所要時間

IV. 考察

本研究の結果より、コンサルティである担任が主体的に参加した行動コンサルテーションを通して、朝の準備行動の改善が見られた。①好きな活動（iPad）をするための条件を本人にとって明確に設定すること、②朝の準備行動の所要時間を視覚的に本人が確認できるようにグラフで提示することが効果的な支援であったといえる。